

「英語コミュニケーション演習 III」での英語ディスカッションの評価

英語教育講座・池野修

1. 授業の概観

「英語コミュニケーション演習 III」は、受講生の専門である「教育」に関する諸問題（e.g. 学歴社会の功罪、ゆとり教育と学力低下問題、塾と学校の関係）について、英語でコミュニケーションを行いながら学ぶという授業であり、次の3つの目標を持っている。

- (1) 関連情報を英語で聞いたり読んだりすることを通して、扱った教育問題についての理解を深める。
- (2) 扱った教育問題について、自分の意見を英語で述べられるようにする。
- (3) 扱ったトピックに関する英語表現に限定されない、より一般的な英語コミュニケーション能力を向上させる。

授業では、Show & Tell, Read & Tell, Listen & Tell, Shadowing, Reproduction, Debate などの多彩な言語活動を行っているが、この報告書では、中心となる授業活動の一つである英語ディスカッション（=あらかじめ Study Guide で提示された論点について自分の意見をまとめて授業に参加し、ペアやグループで英語で意見を交換する活動）についての調査結果について考察する。今年度の授業は、例年に比べて英語ディスカッションが困難であるという印象を受け、その原因を探る必要があると考えたため、本年度の授業研究のテーマとした。なお、今年度のこの授業の受講生は 25 名であった。

2. 授業評価法

授業のメイン活動である英語ディスカッションについて、その困難さの原因と対策に関する情報を得るねらいで、最終授業で受講生にアンケートを実施した。質問は、(i) 授業準備、(ii) 英語ディスカッションの困難点、(iii) ディスカッション改善への提案に関するものであり、(i) (ii) については、「1」（＝全くそう思わない）～「5」（＝強くそう思う）の5件法尺度で、(iii) については、自由記述の形で回答を求めた。回答数は 24 である。

3. 授業評価結果

まず「(i) 授業準備」に関する回答結果は以下の通りである。

表 1. 授業準備について

	1	2	3	4	5
(a) 課題リーディング（指定された英文）をきちんと読んで授業にのぞんだ	-	-	1	15	10
(b) Discussion Points についての自分の意見を英語で言えるように、メモを作成して授業にのぞんだ	-	-	4	13	7

この結果が示す限りにおいて、英語ディスカッションの困難さの原因は、授業準備をしていなかったことではなさそうである。（ただし、自由記述回答には、「途中、友人が『予習しなくてもバレない』という甘い考えを言っていた」という授業担当教員に失望感を与えるものもあった。）むしろ、後述のように（「(iii) 改善への提案」を参照）、準備の中身に問題があったと判断される。

「(ii) 英語ディスカッションのどこに困難さを感じているのか」については、次の (A) から (H) を提示し、それぞれがどの程度重要であるかの判断を求めた。回答結果は次の通りである。

表 2. 英語ディスカッションの困難さの原因

	1	2	3	4	5
(A) ペアの相手、グループの他のメンバーがきちんと準備をしていなかった	9	13	1	1	-
(B) ペアの相手、グループの他のメンバーと自分の意見が同じで議論になりにくかった	2	7	9	6	-
(C) ディスカッションの時間が十分でなかった（もう少し時間をかければ良いものにできた）	3	7	10	4	-
(D) 「絶対に英語で行わなければならない」という雰囲気ではなかったため、安易に日本語に逃げてしまうことが多かった	-	6	8	10	2
(E) あらかじめ書いてきたものを読み上げるだけ	1	5	8	8	2

で、それに対する相手の質問や意見に回答するのが難しかった					
(F) そもそも今の自分の英語力では英語でディスカッションをするのは難しい	-	3	9	7	5
(G) 授業で扱ったトピックについては、日本語で議論するのも難しい	4	9	3	6	2
(H) 他の学生の前で自分の意見を(英語で)述べることに抵抗がある	7	9	7	1	-

多くの受講生は、「(D) 授業活動における英語使用の不徹底」「(E) 準備していない内容に対する応答」「(F) 一般的な英語コミュニケーション能力の不足」などの要因が重要であると判断している。(D) については、「大学生で、この授業をとっている学生だから、英語で活動を行うことの意義は十分に分かっているはずだ」と受講生に任せた部分も大きいのであるが、担当教員が予想した以上に、今年度はこの問題が深刻であったようである。(これは (F) にも関係しており、英語コミュニケーション能力が十分でないために、安易に日本語に逃げてしまう受講生が少なくなかったと考えられる。)(B) 意見のギャップのなさ」を原因と捉えている受講生もかなりいる。ディスカッションを行う相手が同じ人ばかりであったり、似たような意見を持っている人と議論したりすると、コミュニケーションへのエネルギーが生じにくい。今年度は、発話量を増やすねらいでグループ活動よりもペア活動を従来より多く活用したため、結果的に意見の相違が生まれにくかったことも考えられる。これらの要因とは対照的に、「(A) グループの他のメンバーの準備不足」や「(H) 他人の前で英語で意見を述べることへの抵抗」などの要素は、あまり重要な原因と認識されていない。

さらに、個人的な感想としては、新しい LL 教室環境も英語ディスカッションの困難さの一因となっていたように思われる。前年度の終わりに LL 教室を大幅改修し、CALL 機器は新しくなったが、英語コミュニケーション活動には不都合な点も出てきた。例えば、(机が固定式なのは以前と同じであるが)モニターが机の上に乗る形になったため、グループを作ったときお互いが見えにくくなった。また、顔を合わせて議論できるように通路を隔てて 4 人グループを組むようにしたため、教員が机間支援を行いにくくなった。こうした教室環境の些細な変化が、昨年度まではよりスムーズに

行えていた活動に影響を与えていることは否定できない。

「英語ディスカッション改善への提案」に関しては、受講生から次のような回答が得られた。

○ディスカッションに使えるような表現を教えてください。

○「日本語を使ってはいけない」というルールをより強くする。

○紙に書いたことを読み上げるということからアイコンタクトをかねた会話となるようにすべき。

○充実したディスカッションを行うためのスキルを学ぶ。

○ペアではなくグループで議論するという形をもう少し増やしても良い。

○皆の意見を共有した方がいいと思います。ペアの人の意見だけでは意見が偏ってしまうから。

これらの提案を参考に、次年度の授業では次のような変更を加えることを考えている。(1) 扱うテーマに関して、議論される可能性の高い内容を予想し、関連の英語表現のリストを受講生に与えるようにする。(2) 「言い換え方略」(＝言いたいことを表現する単語を知らなかった場合に用いるコミュニケーション方略)を継続的に指導する。

(3) 意見の多様性をさらに生み出すために、今学期よりも、グループでの議論の場を増やしたり、ペア・グループ編成にさらなる変化を持たせる。

(4) Study Guide に提示する Discussion Points に関して、答えをキーワードの形で書いて来ることを徹底させる。(文の形で書くと、それを読み上げるというスタイルになりがちであり、メモを手がかりに語ることがしばしば妨げられるから。)(5) 授業中の(過度の)日本語使用に対してより厳しい態度で対応する。また、効果的なディスカッション・スキルについても、その具体的内容を特定し、関連の練習活動を開発して、ステップ・バイ・ステップで指導を行っていきたいと考えている。

4. まとめ

自分たちの専門に関するトピックについてであっても、英語で意見交換を行うことは決して容易ではないのであるが、今年度の英語ディスカッションでは、例年に比べてより重度の困難さを受講生が感じていた。その原因を特定するために行ったアンケート調査の結果を参考にして、来年度はよりスムーズな、英語習得の面でもテーマ学習の面でもより効果的な英語ディスカッションが行えるようにしたいと考えている。